

パンフレット (両親指導の手引き書) のすすめ



㊸ 「親の会活動－はじめの一步－」

㊹ 「親の会があったからこそ」

紹介者

前鳥取県ことばを育てる親の会・会長
八峠なつみ

長い間「親の会」の空白地帯だった鳥取県に「鳥取県ことばを育てる親の会」が発足したのは、平成13年6月のことです。その年の4月、当時小学2年生の長男が「ことばの教室」に通級し始めた私は、教室担当の先生に声をかけられ「親の会」がどういうものなのか何も知らないまま活動に参加、早いもので5年目を迎えました。手元に発足当時の文集「たんぽぽ」があります。読み返してみると、ことばやコミュニケーションの苦手な子どもたちやその家族を支えていこう、保護者同士支えあおう、そのためにも「鳥取県にも親の会を」という気持ちでまとまった当時の熱い思いがよみがえってきます。その思いのまま5年、と言えればいいのですが、全国的な研修会等に参加し県外の親の会とのつながりを深めていく一方で会を運営していく上での課題も見えてきました。人口規模が小さく東西に細長い県のため各教室の距離が遠く、会員同士が交流する機会が持ちにくい。新しく通級を始めた方に「親の会」の思いを伝える事が難しく会員がなかなか増やせない。役員のなり手が少ないなどです。ただ、集まる機会は少なくとも、レクリエーションでの親子の輝く笑顔を見たり、「親の会で話せて、心が軽くなった」「がんばる力をもらった」などの声を聞くと、親の会の必要性をひしひしと感じます。

親の会運営のノウ・ハウがいっぱい

パンフレット㊹「親の会があったからこそ」は、現在NPO法人全国ことばを育む会の副理事長をされている加藤碩さんが共に歩まれてきた山口市白石「ことばの教室」の30年間の記録をもとに書かれています。この本には親の会を運営していく上での大事なことがたくさん詰まっていますが、なにより「山口親の会」の保護者の「親の会」に対する思いがまっすぐに伝わってきます。「なぐさめ、はげまし、助け合っていくこと」が原点と言われていますが、我が子の障害を知ったショック。見通しの持ちにくい子育ての難しさ。周囲の無理解で味わう孤立感。自分のつらい気持ちを誰にも理解してもらえない気がして、一人で抱えこんでしまい、動けなくなったりします。そうした時「親の会」で同じ気持ちの仲間に出会え、「自分だけじゃないんだ」と楽になる。そして子ども達のためになることは何かを考え、共に学びあい、改善するために働きかけていく力をつけていく。

山あり、谷ありを乗り越えて

㊸「親の会活動－はじめの一步－」(平成7年3月発行)の中にこんな一説があります「全国言語障害児を持つ親の会が、わずか三人の母親たちと、先生ひとりから始まったのは、今から三十何年前です。わが子にとって、いちばん都合の良いことばの指導を受けられるようにするために、必要にせまられてつくった会です。(中略)教室を全国に設置しようという運動があったことを忘れてはならないと思っています。」子ども達は日々成長していきます。親も共に成長していきたい。それを支えあえる「親の会」でありたい。山あり谷ありの歩みですが喜びもたくさんあります。迷った時、悩んだ時、これらのパンフレットを読み返せば、きっと力がもらえます。